

7月第4週の礼拝 説教

- 日 時：2022年7月24日（日）牧師就任式
- 説 教：岩田昌路牧師（西東京教区総会議長、狛江教会）
- 説教題：「み言葉を行う人になりなさい」
- 聖 書：ヤコブの手紙 第1章19-25節（新約p422）

今朝は、西東京教区の交わりの中にある、立川教会に導かれて、4月に着任された保科けい子牧師をはじめ、教会に連なる皆さまとともに主日礼拝の恵みにあずかることがゆるされましたことを心から感謝いたします。立川教会は、西東京教区内の多くの教会がそうであるように戦後の開拓伝道によってその歴史がはじまり、今年の二月に創立71周年を迎えておられます。保科けい子牧師は、その第8代目の主任牧師として伝道・牧会のご奉仕を開始しておられます。今日の説教と牧師就任式のご奉仕をまことに光栄なことと受けとめつつ、立川教会の皆さまに主の恵みと平和が豊かにありますようにお祈りいたします。

私たちは、聖書の証しする主イエス・キリストを通して、神さまの御言葉を聞き、信仰に導かれました。使徒パウロは、ローマの信徒への手紙10章17節で、「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。」（ローマ10章17節）と語りました。そして、私たちの信仰生活は、御言葉に聞き続ける生活であるということが出来ます。このことが疎かにされる時に、信仰はいとも簡単に墮落します。ある信徒が「今日の信仰は明日には腐る」ということを言いました。まさにその通りです。今日この時、聖なる神さまの御前に生き生きとした信仰をあたえられても、その信仰はこの世のさまざまな力に翻弄されます。この世には、罪の力、死の力、悪しき力、時代の霊、さまざまな諸力が渦巻いています。そして、私たちの信仰は絶えずそのような諸力の挑戦を受けるのです。それゆえに、御言葉を聴くことは信仰者の生命線であると言えます。「聞く」ことの大切さはどんなに強調してもし過ぎることはありません。

本日は、新約聖書のヤコブの手紙から御言葉を示されました。このヤコブの手紙の著者も「聞く」ことの大切さを誰よりも自覚していた信仰者でした。一章一九節には、「だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。」と記されます。この御言葉は、すべての人間がむしろ逆の傾向性に生きていることを、私たちに自覚させます。私たちは、「聞くのに遅く、語るに早く、怒るのに早い」のです。特に、聞くことに遅いという点について、私たち信仰者は深い自覚をもたねばならないのです。神の言葉を聞くことに遅いという現実があるでしょう。さらには、他者の言葉に聞くのに遅いとい

う現実もあるでしょう。神の言葉に聞くのに遅い、他者の言葉に聞くのに遅いという二つのことは、深くむすびついていきます。

このあと、牧師就任式を行います。牧師は伝道者であり、説教者であり、聖礼典の執行者であり、牧会者でもあります。主から委託された大切な努めに生きるためには、御言葉を聞くことへの自覚と訓練が何よりも必要であると、私もひとりの牧師として自覚させられています。神学生時代に、説教の教科書ともいえる R・ボーレンという神学者が書いた『説教』を読み、伝道者となりましてからも、さまざまな学びでこれを読みました。この神学書にも、聞く、ことについての思索に満ちています。28章に「聞くということについて」という章があるのです。その章の中にある言葉に、「聞くためにこそ、人間は造られ、選ばれているのである。」という言葉があります。大変に印象的な言葉で、私もよく思い起こす言葉です。今、私たちがこの礼拝に集っているということの背後にも、神さまの永遠の意志決定による選びがあります。伝道者だけではなく、すべての信仰者は、神さまの選びと召しによってたてられた者たちです。私は今日この講壇にはじめて立ちまして、ここにも神さまに選ばれ召された仲間たちがおられる。そのことを覚えて、神さまの素晴らしい御業を見るのです。そして、今ここにいる私たちが「聞くためにこそ」選ばれ召された者たちだと自覚させられるのです。私たちの存在は、「聞くためにこそ」あり、恵みによる選びが聞くことを可能にするというのです。牧師は、託されている教会の仲間たちに先じて、主日礼拝の準備として、神の言葉を聴くことに選ばれ、召され、立てられます。教会連なるすべての者たちが、神の民として、神に言葉に聞くためです。そして、私たちが聴くという一点についても、それは自力でできることではなく、主の力によって可能となるのです。

ヤコブの手紙は、「聞くことに早くあれ」と教えたあと、「御言葉を行う人となりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。」（1章22節）と記しています。ここでは「聞く」ことの質が問われているのです。ここでも、ボーレン教授の言葉を借用します。「人間というのは、聞いて聞くこともできるし、聞いてきかないこともできる。人間が聞くということには二つの意味がある。一つの聞き方は聞き手に何の変化ももたらさない聞き方～（中略）～もう一つの聞き方は、御言葉によって自分が動かされるような聞き方である。」いうまでもなく、後者の聞き方、御言葉によって自分が動かされるような聴き方こそ祈り求めるべきものです。私たちが「御言葉を行う人」に向かうような聞き方です。けれども、どうして「聞くだけで終わる」ということが「自分を欺く」ことになるのでしょうか。直前の「心に植え付けられた御言を受け入れなさい。」

(21節)という言葉に注目する必要があります。ここからわかるように、この手紙はすでに洗礼を受けて救いを与えられた者たちに語られている勧めであります。あなたがたは洗礼をうけてキリスト者とされた。あなたがたの心にはすでに御言葉が植え付けられている。その御言葉を常に受け入れて生きることこそ本当にあなたらしい生き方になる。だから自分を欺くような聞き方をしてはならない。ヤコブの手紙はそう語っているのです。なぜなら、御言葉には「魂を救うことのできる」(21節)圧倒的な力があります。その御言葉は洗礼を受けて、キリストに結ばれた私たちの心にすでに植え付けられています。みなさんの存在の最も深いところに、神の言葉が植え付けられている。神の言葉は人の心に植え付けられたならば、その力がその人において発揮されることを求めてやまないのです。

マタイによる福音書5章～7章には、主イエスが語られた山上の説教が記されています。その最後に、主イエスはひとつの譬え話をお語りになられました。新共同訳には「家と土台」と題がついている箇所です。「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。」(マタイによる福音書7章24節)主イエスは「わたしのこれらの言葉を聴いて行う者」という言葉遣いをなさいました。つまり、「聞いて行う」とは一息で語られるのです。聴くことと行うことがばらばらになっていない。そこに信仰によって義とされた者たちの自然な姿があるのです。御言葉に生きる姿です。神さまを愛し、隣人を自分のように愛する姿です。礼拝を捧げること、祈りを捧げること、伝道に励むこと、愛の奉仕に励むこと、すべては、御言葉を心に植え付けられた者の姿なのです。

ここでしばらく立ち止まりたいのは、25節の「自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ」という言葉です。御言葉を受け入れ、御言葉を正しく聞くという生き方は、御言葉を「一心に見つめる」という言葉でも言い表されています。ここでは、聴くことと、見ることは一つにされています。実は、この「一心に見つめる」という言葉は「かがんでのぞき込む」「身を乗り出すようにして見つめる」という意味です。この単語を調べている時に気づいたことがあります。この言葉は新約聖書の福音書の中で、主イエスの復活の物語で用いられているのです。空虚な墓を見た婦人たちの言葉を聴いたペトロの姿を表すために用いられています。「しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った。」(ルカによる福音書24章12節)空虚の墓をかかんでのぞき込む。空になった墓の中を、身をのりだすように見つめる。ここに一心に見つめるという言葉と同じ言葉が使われています。あのペ

テロは、空虚な墓を、身をかがめて見つめたのです。「かがんでのぞき込む」「身を乗り出して見つめる。」そこには驚きがありました。そして、その驚きは驚きで終わらずに、復活の主イエスを仰ぐ大いなる喜びへと通じています。自由をもたらす完全な律法、すなわち、御言葉を一心に見つめる時に、私たちにわかってくることがあるのです。主イエス・キリストの十字架と復活による勝利、神さまの愛と恵みのご支配があるということです。私たちは、御言葉に聴き、御言葉を見つめる時に、主イエス・キリストの十字架と復活による勝利、神さまの愛と恵みのご支配の中に生かされていることがわかるようになるのです。

ヤコブの手紙は、ここで大変におもしろい例えを用いています。

「御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようなものであったか、すぐに忘れてしまいます。」（1章23～24節）鏡に映った自分の姿を忘れるとはまことに不思議な例えです。自分の顔や姿を忘れることは普段はありえないことです。けれども、聖書の鏡に映る自分の姿であればどうでしょうか。神のみ前に自分がどのような存在であるかを忘れてしまうことは人間の変わらない現実でもあります。私たちが御言葉によって映し出されるのはどんな姿でしょうか。生まれながらの姿であるなら、罪人としての自分の姿ということになります。しかし、御言葉を一心に見つめるとき、私たちはそれとことなる自分の姿を発見します。キリストの勝利、神の恵みの支配の中で新たに生まれさせられた神の子としての姿です。

私たちは主日礼拝のたびに、見えないものに目を注ぎ信仰を新たにされます。見えない存在の第一は、神様ご自身です。復活の主も聖霊なる神も見えない存在です。もうひとつ大事なことがあります。それは、私たちの見えない姿です。見えているのは、罪にまみれ、弱く、愚かで、聞くことのできない私たちです。それは、見える教会の姿でもあります。しかし、私たちはその見える教会の姿、見える信仰者の姿にまさって、神さまに愛され赦されている神の子とされたお互いの姿を見つめることができます。聖なる者とされたお互いの姿です。何と光栄なことでしょうか。教会には、いつでもその驚きと喜びが満ち溢れているのです。御言葉を聴く、御言葉を一心に見つめることは、このような自分を発見する大きな驚きと喜びをもたらすのです。

宗教改革者ルターは、この書を「藁の書簡」といって重んじませんでした。信仰によって義とされるという教えに対立するように受けとめたのです。しかし、そうではありません

ん。信仰はいつも生き生きとした生活を生み出します。私たちはそのことについてこのヤコブの手紙から多くのことを学び取ることができます。私たちが深い祈りをもって、御言葉を聞き、御言葉を一心に見つめる時に、御言葉は偉大な力を発揮し、私たちの全生活、生命そのものを衝き動かしはじめるのです。私たちは信仰生活の中で御言葉の力の素晴らしさを味わい続けます。御言葉はどんな暗闇からも私たち人間を立ち上がらせる力をもっています。だからこそ、御言葉の力に生かされることをこそ私たちの切なる祈りとして生きたいのです。立川教会が御言葉の力に生き続ける教会であることを、保科けい子牧師が御言葉に仕える教師として豊かに用いられることを、心からお祈りするものであります。お祈りいたします。天の父よ、聞くべき言葉を聞くことのできない私たちに、聞くことのできる耳をあたえて下さい。見るべきものを見ることのできない私たちに、見ることのできる目をあたえてください。この地に立つ立川教会がいつでも御言葉の力に満たされ、あなたの尊い御業に仕えることができますように。そのために、主任牧師としてあなたが選びたてられた、保科けい子牧師をあなたが祝福して下さい。また、教会員の一人一人に御言葉を聴いて行う者として生きる驚きと喜びを大きなものにしてくださいますように。主イエス・キリストが罪と死に勝利し、あらゆる諸力に勝利されたお方であることを、立川教会が力強く証できますようにお導き下さい。これからの立川教会の歩みを委ねて、この願いと感謝を主イエス・キリストの御名によってお捧げいたします。アーメン。